



Shueisha
Series
Common

コモンの「自治」論

斎藤幸平＋松本卓也＝編

白井 聡

松村圭一郎

岸本聡子

木村あや

藤原辰史

集英社シリーズ・コモン

はじめに——今、なぜ〈コモン〉の「自治」なのか？

斎藤幸平

戦争、インフレ、気候危機など、さまざまな困難が折り重なって、一筋縄では何も解決しない危機の時代に突入している。その事実には、誰もが気づいているはずだ。多くの要因が絡み合ったこの複雑な危機を、魔法のように一気に解決することはできない。

それでも、いや、だからこそ、〈コモン〉の再生とその共同管理を通して「自治」の力を育てていかねばならない。これが、『コモンの「自治」論』というタイトルに込めた決意である。では、〈コモン〉とは、そもそも何だろうか。日本語では〈共〉とも訳される概念で、誰かや企業が独占するのではない「共有物」という意味だ。ひとまずは宇沢弘文氏の「社会的共通資本」を思い浮かべてもいいだろう。

たとえば、村落全体で共同管理されてきた入会地いりあいちや河川水などは〈コモン〉の典型だ。ところが、資本主義が浸透するにつれ、こうした共有資源は私有化されていく。それどころか、今やあらゆる〈コモン〉が解体されようとしているのだ。

公営事業である水道も民営化推進の動きがあり、大企業がそこに利益獲得の活路を見出すようにしている。公園などの公共の場を、市民の議論を排除しながら、商業施設に変えてしまおうという大資本の動きも「ヘコモン」解体の一例だろう。資本は「ヘコモン」であったものを独占することで容易に利潤を手にしていくのだ。これを「略奪による蓄積」と地理学者デヴィッド・ハーヴェイは批判する。^{*1}

そうした資本による略奪に抵抗して行う「ヘコモン」の再生とは、他者と協働しながら、市場の競争や独占に抗い、商品や貨幣とは違う論理で動く空間を取り戻していくことだ。本書でも触れられている、水やエネルギーや食、教育や医療、あるいは科学など、あらゆる人々が生きていくのに必要とするものは、「ヘコモン」として扱われ、共有財として多くの人が積極的に関与しながら管理されるべきものなのだ。

では、なぜ、その「ヘコモン」と「自治」が危機の時代を生き抜くためのカギになるのか。詳しくは本書を読み通していただきたいのだが、その理由は私たちの時代の背景について理解することで浮かび上がってくる。

現代の困難な状況を「複合危機」（ポリクリシス）と呼ぶようになってきている。新型コロナウイルス・ウィルスのパンデミックもその危機のひとつであったし、止まらない気候変動の影響で食糧危機や水不足、難民問題などが今後もさらに深刻化していくだろう。^{*2} そうなれば当然、資源獲得競争や排外主義の台頭によって世界がさらに分断されていく。それが、今度はインフレや戦争のリスクを増大させる。

つまり、自然環境破壊や経済危機、地政学リスクなどの複数のリスク要因が増幅し合い、文明と平和、生存を脅かすのだ。

今後、複合危機によって事態が悪化することはあっても、急激に改善することはない。私たち人類の経済活動がこの惑星全体で不可逆的な変化を起こした結果、慢性的な緊急事態に突入しているからだ。それが「人新世」という時代なのである。

「人新世」とは、資本主義のもとでの人類の経済活動が、この惑星のあり方を根底から変えてしまった時代を指す、地質学の概念だ。地層というのは本来、非常にゆっくりとしたペースで形成される。しかし、化石燃料を大量に消費する資本主義の発展に伴い、自然の時間とはまったく違う急速なスピードで、人類が地球全体を改変するまでに至った。資本の終わらなき利潤獲得が、地球という人類共通の財産Ⅱ（コモン）を痛めつけたせいで、もはや地球環境は修復不可能な臨界点に近づいている。その帰結が、「人新世」の複合危機^{*3}だ。

「人新世」の危機が深まれば、市場は効率的だという新自由主義の楽観的考えは終わりを告げる。むしろ、コロナ禍でのロックダウンであるとか、物資の配給、現金給付、ワクチン接種計画のように、大きな国家が経済や社会に介入して、人々の生を管理する「戦時経済」に変わらざるをえないからだ。ここに、資本主義の危機がある。

その戦時経済は、民主主義の危機をも引き起こす。慢性的な緊急事態に対処するために、より大きな政治権力が要請されるからである。要は政治がトップダウン型に傾いていくのだ。

そんななかで、もし排外主義的なポピュリストが権力を握って、暴走を始めれば、民主主義

は失われてしまうだろう。全体主義の到来だ。

こうした最悪の事態を避けるために、トップダウン型とは違う形で、「人新世の複合危機」へと対処する道を見出す必要がある。

そして、それが「自治」という道にはかならない。

もちろん「自治」に希望を見出すことについて、あまりに理想主義だと感じる方もいるだろう。実際、私たちはこの社会のルールや仕組みについて、責任を持って自分たちで決め、運用していると胸を張って言えないはずだ。

日常生活において、自分たちで決められることはとても限られている。自由に決められるのは、コンビニでのお菓子を買うかとか、休みの日にどこに遊びに行くかを決めることくらいではないか。その際にも、スマホに表示される商品のレビューやGoogle Mapの指示に従って私たちは行動している。もうあと数年すれば、何を食べるか、休日に何をするかをChatGPTに決めてもらう日が来るかもしれない。

そう、私たちは、自分たちでは何も決めることのできない他律的な存在になっている。日々の生活でもこんな状況なのに、政治や社会についての重大な決定を、私たちが責任を持って行うことなど想像すらできない。それは当然のことだろう。しかも、競争の激しい自己責任型社会に生きる私たちは、他者と協働して、大きな課題に取り組みむ力を失いつつある。それよりお金を稼いで、自分たちの個人的な欲求を満たすほうに関心を持つようになっていく。

けれども、そうやって「自治」の力が弱まるうちに、一部の政治家や富裕層、そして大企業

が自分たちに有利になるルールをつくって、ますます社会を私物化するという悪循環に陥っていないだろうか。

この悪循環を断ち切るために求められているのが、冒頭で述べた〈コモン〉の再生であり、〈コモン〉の共同管理である。それは、簡単なことではない。しかし、〈コモン〉の共同管理をめざす場で、私たちは「自治」の力を磨いていくしかない。

そして、〈コモン〉のあり方を外部に開きつつ、平等な関係をつくることが重要なのである。なぜ、〈コモン〉が「開かれている」ことが大事なのかと言えば、外部の人たちに対しては攻撃的で、排他的な「自治」もあるからである。たとえば、移民排斥を訴える右派ポピュリズム政党も「自治」の取り組みと言えるかもしれないが、それでは「自治」がファシズムを生み出すことになってしまう。

また、不平等な「自治」も存在する。たとえば、古い体育会系の考え方に凝り固まったスポーツ協会があれば、それは不平等な「自治」の典型である。その内部で年功序列や能力主義が蔓延していれば、それがパワハラやセクハラの温床になるわけだ。さらに、その団体の外部にある〈コモン〉を壊すことも、自分たちの組織の利益のためなら「良し」とされ、内側から異議を唱える声も圧殺されることになる。

つまり、「自治」であれば何でもいいというわけではない。より「良い」自治を考えるために、〈コモン〉という考えが欠かせないのである。

〈コモン〉とは、単に「自治」をするだけでなく、それを民主的で、平等な形で運営すること

をめぐすものだ。必要なのは、〈コモン〉の再生に依拠した「自治」の実践なのだ。

本書のために集まった七人の執筆者たちはこの困難な時代を認識したうえで、「自治」の力を日本社会で取り戻すためのヒントを提示しようとしている。〈コモン〉を耕し、それを管理する方法を模索するなかで、私たちの「自治」の力を鍛えていく。それこそが「人新世」の複合危機を乗り越える唯一の方法なのだ。

その試みの始まりは、小規模でもいい。それが大きくなっていけば、社会を変える力になるはずだ。『人新世の「資本論」』でも述べたように、ハーバード大学の政治学者エリカ・チェノウエスによれば、三・五%の人々が立ち上がることで社会は変わる。その第一歩を、私たちは今こそ決意して、踏み出すべきである。本書の内容は、その際、必ず役に立つはずだ。

コモンの「自治」論 目次

はじめに——今、なぜ〈コモン〉の「自治」なのか？ 斎藤幸平

3

第一章 大学における「自治」の危機 白井聡

19

新自由主義が損なう「自治」の能力

資本のための大学でいいのか

若者の成熟を阻害する社会

新自由主義が奪う成熟、そして「魂の包摂」

「六八年」以降の反革命

全共闘運動——前衛と大衆の乖離から政治嫌悪へ

日大紛争——温存された腐敗の構造

大学当局が恐れた共産党の伸長

大学紛争のトラウマとカルトを使った「正常化」

空間の新自由主義的再編

孤立させ、管理せよ

「自治」を奪う大人たちの責任

「自治」の実質を取り戻す

第二章 資本主義で「自治」は可能か？ 松村圭一郎

——店がともに生きる拠点になる

「自由」や「自治」は歓迎されなくなった？

貨幣経済の浸透で薄くなる人格的なつながり

マルクスの商品交換論

古典的な文化人類学における「贈与」と「商品」

商品交換と贈与は二分できない

商品交換の場である「店」の現実

居場所としての「店」

市場原理と贈与交換のブリコラージュ

ボードリヤールからグレーバーへ

「自治」の固定概念をひっくり返す

生き延びるための「すきま」

バラバラで小さい店の自由で柔軟な「自治」

独立自営業という希望

あらたな政治／自治への想像力を持つこと

第三章 〈コモン〉と〈ケア〉のミニシパリズムへ 岸本聡子

「自治」とは暮らしの未来を考える行為

国政ではなく地方自治から始める意味

民営化の正体——国家と資本の癒着

〈コモン〉の管理から始まる「自治」

国家と資本を恐れないフィアレス・シティ

ミニシパリズム——広がる市民の挑戦と自治体の連帯

政治のフェミニナイゼーションと〈ケア〉の思想

〈コモン〉と〈ケア〉の両輪

地方自治から国政を揺るがす南米チリ

インソーシングで「命の経済」を耕す

インステイテューションを変えるのは市民

杉並区の児童館と住民の声

市民と歩くインステイテューションをつくる

上からでもなく、下からだけでもなく

少人数で「ここから」始める

コラム②―「自治」の現場から 市民一人ひとりの神宮外苑再開発反対運動 斎藤幸平

116

第四章 武器としての市民科学を 木村あや

123

「自治」の種をまく市民科学

市民科学の先駆

脚光を浴びるシチズン・サイエンス

科学をオープンなものにする

市民科学が自治体を動かす

新自由主義とのジレンマ①——「科学の民営化」でいいのか？

新自由主義とのジレンマ②——「自己責任」論が強化されてしまう

科学主義とのジレンマ①——脱政治化の罟

科学主義とのジレンマ②——データ化できないものの周縁化

「つくられた無知」

データ・ポリテイクス——データは誰のものなのか

争点隠しの手段に使われる可能性

市民か、それとも活動家か——境界線の引き方

データの公共性を大事にする

社会運動としての市民科学を

「リテラシー」と「データ」の意味を広くとらえる

「場」をつくる市民科学

第五章 精神医療とその周辺から「自治」を考える 松本卓也

息苦しい医療現場

日本の精神医療の抑圧的な過去

精神医療における「自治」とは何か

「六八年」の思想と反精神医学

東大闘争（東大紛争）と日本の精神医療改革運動

「反精神医学」のルーツ、イギリスでの実践

「ふつうの精神科医」の誕生——木村敏

「病棟を耕す」という静かな革命——中井久夫

異質な他者を欲待することによって自分自身が変化する

ポスト反精神医学としてのラ・ボルド病院

「言う」ことを可能にする「自治」の場

反精神医学ではなく「半精神医学」——当事者研究

「ポスト六八年」の思想の実践としての「べてるの家」

「当事者になる」こと

「主体集団」がつくる「斜め」の関係

世界をましなものに組み換えるための〈自治〉

コラム③——自治の現場から 野宿者支援からのアントレプレナーシップ 斎藤幸平

192

第六章 食と農から始まる「自治」 藤原辰史

197

——権藤成卿自治論の批判の先に

「自治」の問題としての食と農

農村自治に魅了された柳田國男

斎藤仁の「自治村落論」

農本主義の引力

権藤成卿とは何者か

権藤成卿の理想——「社稷」共同体による農民の「自治」

権藤のアナキズム的な側面

平等を求めて——大化の改新と班田収授法の評価

暴力的な改革礼賛と昭和維新テロへの影響

軍国主義と農本主義

左派と権藤成卿

権藤の時代批判力

リアリティの欠如がもたらした破綻

自己責任論的態度

有機農業の身体性

「自治」の原点は人間関係

食堂付属大学の試み

第七章 「自治」の力を耕す、〈コモン〉の現場 斎藤幸平

「自治」をめぐるふたつの困難

「構想」と「実行」の分離

資本による「魂の包摂」

貨幣がもたらした「自由」は自由なのか？

コスパ思考が民主主義の危機を深める
政治主義の罨

なぜ社会の保守化を止められないのか
権力の補完勢力に成り下がる社会運動

「上から」の改革に希望はない

「下から」の変革と「自治」の力

二〇世紀の限界——社会主義国家と福祉国家の共通点

二二世紀の新展開——水平的ネットワーク型の社会変革が始まった！

「生政治的生産」の力を使う

マルチチュードによる〈コモン〉型社会

ルールとリーダー不在の素朴政治？

リーダーと大衆の逆転

水平ではない「斜め」の関係を

現場の模索がミニシパリズムを生んだ

リーダーフルな運動を育てる

「他律的な社会」を乗り越える自己立法

「人新世」に必要な自己制限

絶えざる自律と他律の循環

他律的なアソシエーションを避けるために

「自治」におけるアントレプレナーシップ

経済の領域が変わると、政治が変わる

「自治」は（コモン）の再生に関与していく民主的なプロジェクト

おわりに——どろくさく、面倒で、ややこしい「自治」のために **松本卓也**

274

註

280

装画 岡崎乾二郎

「すっかり冷えてしまった自分の
コーヒーカップに目をやった。ポット
に残っているコーヒーを火にぶ
ちまけ、その上に滓を落とす短い
間にほんとうに次々いろんなこと
が起こった。昔は眠れないときウィ
スキーを飲んだものだが、どうして
も今はホットミルクだ。ミルクを温
めてスプーンで膜をすくいカップに
注ぐ。冷めるのが待てなくても舌を
火傷したりして、せっかくの幸せをぶ
ち壊しにするわけにもいかない。空
は灰色に変わり鳥が鳴きはじめて
いる。こうやって僕は待つて待つて
待ちつづけてきたものだ。それで?」

1997年 / © Kenjiro Okazaki

撮影：中川周